

日本の創薬ベンチャーは

育ったのか？

▶▶ 中

大手入り

バイオ医薬品という新しい時代の扉を開き、35

社とも新薬の候補物質(シーズ)を積極的に外部から導入する点で一致している。

「ヒト、モノ、カネ。創薬の世界では、このうちモノの価値が最も低い」。

そのせいグループの田村社長は、こう喝破する。「モノ」は、自社で開発した化合物や新た

し、ノバルティスに導出されており、発売以来の売上累計は約137億円に達した。「日本のベンチ

ヤードでこういう製品を持つてい企業は一つもない」(吉田社長)と胸を張る成果だ。元になったベンダムスチン塩酸塩は、アステラス製薬のドイツ法人が持っていた薬。これをわずか5年で

一社長とアムジェン出身でシンバイオ製薬を起した吉田文紀社長だ。両

に化合物を作り出す基礎技術に当たる。同社は、スイス・ノバルティスに導出したCOPD(慢性閉塞性肺疾患)治療薬『シープリ』と、これを元に同社が開発した『ウルティプロ』で、マイルストーンだけで約188億円を受け取る見込みだ。

大元になった物質は、英アラキスが別用途の薬剤をCOPD用に開発し、ノバルティスに導出したもの。そのせいグループは、そのアラキスを買収し成功をつかんだ。

そのせいグループ自体もCOPD治療薬の開発は進めてはいたが、「この物質は間違いなくいける」と確信できる目利き力とベンチャーならではの決断スピードが決め手となった。

5年で用途開発

シンバイオ製薬もエーザイに導出した「トレアキシン」がすでに販売されており、発売以来の売上累計は約137億円に達した。「日本のベンチ

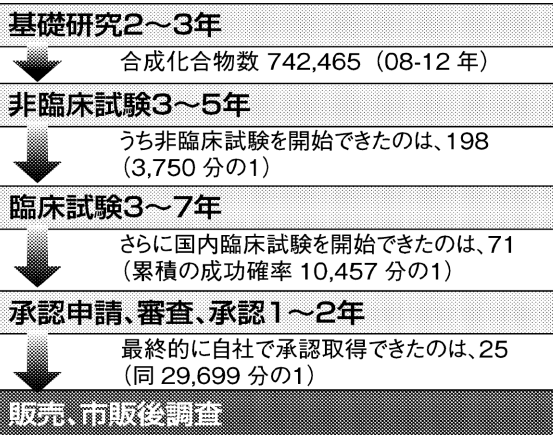
ヤードでこういう製品を持つてい企業は一つもない」(吉田社長)と胸を張る成果だ。元になったベンダムスチン塩酸塩は、アステラス製薬のドイツ法人が持っていた薬。これをわずか5年で

一社長とアムジェン出身でシンバイオ製薬を起した吉田文紀社長だ。両

候補物質は外部から

目利き力・決断速度決め手

創薬の流れ



目的の用途に開発、導出、上市。同社もヒトでの有効性と安全性(POC)が確認された化合物を世界の製薬会社から探し出し、有用性を確認して開発する。

最短ルート

創薬は、基礎研究で生み出した化合物を非臨床・臨床試験にかけ、申請して承認されるまで一般的に9~17年という長い過程を経る。しかも基礎研究の段階で合成された化合物が、最終的に自社で承認を取れる確率は、日本製薬工業協会調査で約3万分の1だった。この長い「死の谷」の前では、大手を含め自前開発

にこだわっているのは到底間に合わない。世界各地に数ある候補物質の中から有力なものに当たりを付け、その後の臨床開発デザインを設計し、導出まで持っていくこと。この過程こそ、創造的な作業として全力を尽くすべきであり、何でも自前開発にこだわる必要はない。この点でかつての日本の大学発ベンチャーは、往々にして学術的な成果を優先する発想と学術目的の開発関係者の輪から抜け出していなかった。創薬ベンチャーには、成功すること、患者を救うこと、このための最短ルートを取ることに何の迷いも必要ない。